

64

吉田流は16世紀の流派と認めがたい

——日本で独自に展開した腹部三腕穴からの考察——

長野 仁

森ノ宮医療学園専門学校はりきゅうミュージアム研究員

日本鍼灸史の通説は、富士川游の『日本医学史』の鍼灸項に負うところが多い。彼の情報源は、第一に浅田宗伯『皇国名医伝』と宇津木昆台『日本医譜』に登場する鍼灸医家の伝記、第二に京大・慶大・日大の各富士川文庫に収まる鍼灸書の序跋である。しかし、とりわけ流儀書の序跋の類は、自流をより古くより高く見せようという脚色が強く、史実と捉えるには危険性がある。演者は現在、16世紀における鍼科と外科の共通性と独立性を研究しているが、富士川説に従って吉田流を当時の流派と認めるには問題があると考えている。

吉田流は、永禄年間に渡明した出雲大社神官の吉田意休が、杏琢周に七年師事して伝授された流儀を継承する流派とされている。しかし、伝承当時の面影を伝える古写本は全く確認できず、三世の吉田一貞が寛文期以降に再編したものが大半を占める。これに反して、吉田流より後発と見做されてきた匹地流には、胡蝶装の古写本や元和～慶安期の年記を持つ伝本が現存するのである。書物という物的証拠からすれば、吉田流と匹地流の前後関係は入れ替えて然るべきだが、現時点で吉田流の古写本の発見に至らないだけではないか、という反論の余地を残す。そこで、日本独自の腹部三腕穴の変遷をたどり、吉田流のそれが最終形態であると位置づけ、物的証拠の傍証としたい。

- ①直線型：夢分流／慶長期。上腹部（脾胃＝後天）を太極、下腹部（腎命門＝先天）を無極とし、上腹部の正中を模倣して下腹部の正中にも下焦の上腕・中腕・下腕を創意、直線上に6穴を配置した。
- ②四角型：小川流／慶長期。正中線上にあった上下の三腕を、左右双行としたことによって計12穴となり、鍼穴の配置が四角形となった。
- ③五角型：匹地流／元和期。『難経』十六難の影響下、上腹部の正中を復活して心の三腕とし、その斜め左下側に肝の三腕を、斜め右下側に肺の三腕を設けた。下腹部の下の三腕は、右を命門三腕、左を腎三腕と名づけた。上腹（陽位）の別称である太極は臍の左側（陽位）に、下腹（陰位）の別称である無極は臍の右側（陰位）に配置した。すなわち、横並びとなる【無極一臍一太極】を脾の三腕に見立てていると推察される。この横一文字を包み込む格好で、時計回りに心・肝・腎・命門・肺の各三腕、計15穴が変則的な五角型を構成している。
- ④六角型：吉田流／寛文期。道三流の脈法の影響下、診脈部位である左右寸口の六部定位の五臓と命門の配当を、腹部に投影した変則的な六角型となっている。すなわち、右の上腹部の上内側に肺の三腕、下外側に脾の三腕、右の下腹部に命門の三腕を、左の上腹部の上内側に心の三腕、下外側に肝の三腕、左の下腹部に腎の三腕を、それぞれ配置している。

このように、日本独自の腹部三腕穴は、2→4→5→6と次第に数を増やしていったと見るのが妥当であり、もっとも複雑な六角型が16世紀の中葉に存在したとは到底考えられない。富永仲基の加上説に従うなら、後発のものほどより古くより高い権威にすがろうとするわけだから、吉田流はその典型例といえよう。吉田一貞は、越前藩医として將軍家綱の治療にも当たった鍼立である。江戸期にあって、彼を穿鑿することは幕府を批判するのと同等の勇気が要ったはずであり、彼が『刺鍼家鑑集』の序文に認めた自流を優位化する物語が、そのまま史実として伝わる結果を招いたのであろう。このように、現代においてさえ日本鍼灸史は近世までの常識に依存する度合いが高いわけだが、諸流派の横断的な比較検討は史実解明の有効な手段の一つであると考えている。

※本報は、第43回（平成26年度）公益財団法人三菱財団法人科学研究助成（ID: 26221）による成果報告の一環である。